2014. 3. 8

書評：著者　森田　六朗「北京で二刀流」（現代書館）定価 1700 円

このところ海洋上の小島をめぐって、領有権争いが喧しい。それに連動するかのように、ナショナリズムを声高に叫ぶ、内向きの動きが目立っている。
つい数年前までは、グローバリズムが時の流れ、と国際化の取り組みが議論されていたことが嘘のようだ。「嫌中」とか「憎韓」とか、また一方で、隣国の「反日」の動きをジャーナリスティックに取り上げるマスコミも多い。いつからこんなに偏狭な社会に変質してしまったのかと、暗澹たる気持ちに陥ってしまう昨今だが、そんな中で、この本は一幅の清涼剤のように読後感が心地よい。

著者は大学で東洋哲学を履修後、教科書大手出版社に勤務していたが、偶々縁があって、十数年前から北京の大学で日本語を教えることになった。この時、小学生のころから始めていた剣道は続けたいと、防具など一式を担いで北京に赴任する。ただ、かつての侵略戦争の記憶から、剣道の稽古が受け入れられるかどうか、と半信半疑でもあったが、若者の好奇心には国境はなかった。アニメに熱中し、コンピューター・ゲームに興ずる姿は共通だった。とはいえ、同じアジアの隣国で、文化的には源流ともいえる中国でも、生活様式はまるで違う。例えば練習の始めに交す「礼」の儀式は、彼らにとっては「屈服」と写る。文化交流と簡単に言うが、意識の壁を超えて交わることは容易ではなかったはずだ。それが今では 5000 人の若者が竹刀を振るい、世界大会に参加するまでになっているという。また本業の日本語教師としても、苦労と笑いの連続、ただ、授業や学内行事を通じた学生との交流は、今の日本の若者が忘れてしまった生き生きとした輝きに満ちている。中国には毎年 9 月 10 日は「教師の日」といい、教師の地位向上を目指す日が定められているらしいが、「先生、いつもご指導ありがとうございます。」と花束や寄せ書きを添える学生や、レストランで皆んなと会食する姿などは微笑ましい。この本では、もちろん漢字そのものへの関心は強く、日本と中国でのニュアンスの違いなども、興味深く記述されている。日本語と剣道と言う、極めて日本的な世界が中国で如何に受け止められ、そして伝えてきたか、10 年以上北京で暮らしてきた日常生活を交えて、ユーモラスに語られる。政治の世界はさておき、草の根ともいえる市民や学生との交流には国境などないことが痛感される本だ。

なお、著者は松江北高校　昭和 38 年卒で、他に「日本人の心がわかる日本語」（アスク出版）などの著作がある。

評者：泉　宏佳（昭和 38 年卒）

北京で二刀流
ヤットウ先生の中国若者ウォッチング
森田六朗
MORITA Rokuro
二刀流だからこそたどりついた洞察が
切れ味するどく綴られた痛快“体験譚”。
剣道先生にして日本語教師!
中国における最大の日本理解者は……。
美質は欠点となる危うさを秘めている。
現代書館